

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

辛 淑玉氏 講演会レポート 「東アジアの和解とレイシズム —ヘイトスピーチを支える日本社会を問う—」

報告者 畠山 保男



一・ヘイトスピーチ

自己紹介の後すぐに、辛さんはまずヘイトスピーチを実際に聞いた人はこの講演会場にいるかどうか、聞いてきた。一〇人ほどが手を挙げたが、そのあとで辛さんが私たちに提示したのは、そのヘイトスピーチを実際に撮影した一二分以上にわたる映像だった。

た。これは効果的で、これまでほとんどの人はテレビのニュースでしか見たことがなかったのである。彼らヘイトスピーチに集まって来た人たちが「外国人を殺せ」とか聞くに堪えない言葉をまき散らし、はき散らしたあとで、解散前に言ったのは、「ああ、今日も楽しかったね」、という言葉だった、と辛さんは言われた。つまりヘイトスピーチという手段をもって人権を無視し、言いたい放題言っ自分の不平不満を晴らすことで、楽しかった、ということを確認して、この人たちは日常生活へ舞い戻ってゆくのである。ヘイトスピーチでやり玉に挙がる人々は、現在の国家が敵とする人たちであり、この人々を非難しても国家か

ら批判されることはない、と見切ったうえで日本社会の周辺に押しやられている人々を非難しているのである。このヘイトスピーチにおいて非難の的となっている「在日特権」というものは、辛さんが直ちに否定したように、存在しない。存在するのは、差別による生きにくさであり、苦しみである。「チョウセンジン」という言葉が今や批判勢力に対する非難として投げつけられている。それはちょうど一九三〇年代から敗戦まで、ドイツにおいて「ユダヤ人」という言葉が持っていたのと同じ負の意味内容を持っている。

このヘイトスピーチから始まって辛さんは多くの例を引き、映像で示しながら、このヘイトスピーチへと至る日本社会の精神構造を、具体的に私たちに示してくださった。言及された全ての例をここで取り上げるわけにはいかないが、以下に

二・法律婚のうちにいる女性と法律婚の外にいる女性とそ
の子どもたち（婚外子）

両者は「平等に扱われなければならない」ということに対して、夫も取られて、金まで取られるのか？ という非難が来ている。法律婚のソトにいる女のくせに、と言う非難が殺到した。つまり男性が日本人で女性が外国人である夫婦を非難しているのである。「行ってらっしゃい、エイズに気をつけて」というスローガンに表現されているように、海外旅行に出かける法律婚の内側にいる妻たちも世間も、男性が性を自ら制御しえないという言い訳に寄り掛かって、突発的な性的欲求を満たすことはやむなきこと、それは咎め立てすることではない、という了解のもとに夫たちを海外旅行へ送り出している、ということになる。そ

れなのに外国人女性を自分の妻として日本へ連れてきて、法的に籍を入れていようがないが、その子どもへの対応は平等であるべきだ、ということに対して「納得いかない」という差別的な叫びなのである。「自分の子どもと一緒にしてくれるな」、ということであり、一緒にされたのでは法律婚によって守られているはずの私とその外にいる女性たちが子どもの権利において同一ということになり、それでは受け入れられない、という強い不満を持つからである。

三・日本の犯罪検挙率・起訴率・有罪率の異常性と死刑制度

起訴されたら九九パーセント以上が犯罪者になる日本という国は異常である。一度容疑者になった瞬間に九九パーセントの確率で、犯罪者となり起訴されてしまう。その意味で日本ではとても簡単に犯罪

罪者が作られてしまう。その関連で、二年に一度の報告会で、国連人権委員会、ある委員が「日本は中世の国か」と、くすくす笑いながら問うた時に、日本の委員が「黙れ、笑うな」とどなった、という。その質問者がアフリカ人だったからである。アフリカ諸国は日本よりも人権環境が低いはずだ、という思い込みから、この日本の委員は「そんなお前に言われたくない、笑われたくない」という思いで見下して、叫んだのであろう。この質問者が欧米人だったら、この日本の委員は怒鳴っただろうか？

狭山事件のことについてもこの関連で言及された。辛さんは個人的意見として、石川一雄さんは一〇〇パーセント無罪である、と言いつつだが、報告者もまだ焼失する以前の狭山の石川家の現地調査に何度か参加して、一目了然のあのかにもい後から万年筆が発見される、ということはある

得ないことだ、と確信して今日に至っている。

四・死刑執行の増加

国が危機的な状況に陥ったときに、最も多く死刑執行が行われる、という事実を辛さんは指摘されたが、第二次安倍政権になってからの死刑執行の増加と、その政権が推し進める「戦後レジームの全否定」と「戦争のできる国造り」とは、軌を一にしている、という指摘だった。

最後に辛さんが推薦されたことは、「乗り越えネット」を検索で引いて、アクセスしてください、ということだった。午睡・惰眠をむさぼる私たちをシャキッとさせてくださった辛淑玉さんに感謝して報告を終わる。(講演..二〇一三年一月二五日、上ヶ原キャンパスG号館二〇二教室)

■研究プロジェクト報告

「現代文化とキリスト教」

RCC主任研究員 東 よしみ

昨年度に始まり二年目に入った「現代文化とキリスト教」プロジェクトは、春学期に今年度第一回目の研究会を開きました。

なものが分析された。

まず、アフリカ系ディアスポラに関する説明がなされた。大西洋奴隷貿易で人々がアフリカ大陸から西半球各地へと連行されることにより、

△第四回研究会△

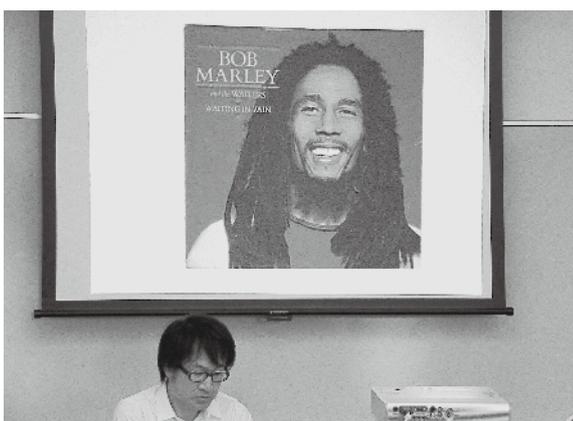
日時：五月八日(木)

午後五時十分～六時四十分
発表者：鈴木慎一郎(RCC
研究員、社会学部教授)

様々な人種・民族集団との不可避的な混交が進行した。元来、パレスティナの地から離散したユダヤ人を指す言葉で

主 題：アフリカ系ディアスポラの表現文化における黙示録的なもの

ジャマイカのラストファアライ(略して「ラスト」)は、千年王国運動、土着主義運動などと形容されてきた社会宗教運動である。この発表では、アフリカ系ディアスポラの音楽における黙示録的



あった「ディアスポラ」という用語も、ユダヤ人以外の各地に離散する人々を指して使われるようになる。ジャマイカのラススタは、アフリカ系ディアスポラの一文化として考察の対象となる。

次に、岡田温司著『黙示録—イメージの源泉』（岩波書店、二〇一四年）から、黙示録的なものは、善と悪との戦い、迫り来る終末意識と、来るべき時代への期待や地上におけるメシア王国の実現への期待、さらに決定論的な歴史観に特徴づけられるということが確認された。

その上で、様々な具体例を通して、アフリカ系ディアスポラの表現文化に見られる黙示録思想が分析された。まず、ジョージ・クリントン率いるパラーメントというユニットが、一九七六年十月に、ヒューストンでのライブで「Swing Down Sweet Chariot」を演奏し、演出した様子がスクリーンに映し出された。ここでは

ゴスペル音楽を思わせる祈りの歌が歌われ、天上からマザーシップという宇宙船が着陸し、場内が熱狂に包まれる。また、Willie Williams, "Armageddon Time" の Horace Andy, "Every Tongue Shall Tell" の歌詞の分析、やうい Michael Prophet, Prince Jammy, Scientist などのレコード・ジャケットの分析がなされた。

これらの例の分析から、まず、アフリカ系ディアスポラの音楽に広く見られる様々な乗り物への関心は、移動、さらには救済、解放への想像力として系譜化できるといことが指摘された。次に、宇宙に故郷を求めると同時に古代志向と未来志向とを併せ持つ破天荒な想像力（アフロ・フューチャリズム）、宇宙的であると同時にコミカルな表現「コ（ズ）ミック・ブラックネス」（鈴木氏の造語）という視点が指摘された。さらに、アフリカ系ディアスポラの音楽には、選民主義と普遍

主義との間の揺らぎが見られるということが議論された。

最後に、これまでキリスト教史の中で、終末の日付を具体的に特定しようとする千年王国説への批判的な視点が常に存在し、「いつ」ではなく「いかに」に焦点が当てられてきたことが確認された。ラススタの終末観、救済観も多様性を見せる。終末の到来の具体的な予言と失敗が何度か繰り返されてきた一方で、多くの者が終末の具体的な日付を特定することは避けてきた。

岡田氏が指摘するように、警告が威嚇に、激励が扇動にと、容易に変化する危険性をもつ黙示録思想の二面性を考える時、黙示的な物語を押し付けるのでもなければ、拒絶、無視するのでもない第三の道が求められる。「イスラエル中心主義」と「ディアスポラ主義」とのジレンマを克服するものとしてサンダー・L・ギルマンが提唱した「フロンティア・モデル」は、ユダヤ

文化は中心的なものを持たずに常に他の文化と出会うフロンティアとして発展してきた

と見る。また、鷲田清一は「予期ではない待機としての△待つ▽」という概念を論じる。これらの概念が、アフリカ系ディアスポラにおける黙示録

的なものを理解し、第三の道を考える上での助けとなる。

次回の研究会は、七月十七日（木）に予定されています。畠山保男研究員が「ホロコースト文学とミュージカル」という題で発表されます。

■研究プロジェクト報告

「東アジアの平和と多元的な宗教・NGO・市民社会の役割」

RCC 副長 山本 俊正

本プロジェクトは二〇一三年度から開始され、二年目を迎え、これまでの平和研究及びエキキュメニカルな視点を活かしつつ、研究員の関心領域に基づく研究発表に合わせ、研究活動を進めた。昨年、開催されたRCC主催の公開講演会、「東アジアの和解とレイシズム—ヘイトスपीチを支える日本社会を問う」（講演者：辛 淑玉、

二〇一三年一月二五日）を受け、本プロジェクトでは、今年度第一回の研究会を以下のように開催した。

△第一回研究会▽

発表題：「現代の若者の生きづらさと東アジアにおける和解と共生のミッションを考える」
日 時：二〇一四年六月四日
（水）



発表者・梁 陽日（RCC 研究員、立命館大学生存学研究中心、マイノリティー研究プロジェクト、プロジェクトマネージャー）

発表では、現在の若者を中心に「反中・嫌韓」などと表現される意識が、マスコミの情報操作によって醸成されていること。また、その結果として在日コリアンなど少数者に対するヘイトスピーチが路上、またはネット上で渦巻いている現状が指摘された。しかし、それと同時に、多くの若者は格差と自らが排除されている現実の中に身をおいていることから、社会の中で、

生きづらさを強いられていることが指摘された。

梁氏は最初に、現在の若者が直面している諸問題を、以下の七点を中心に、統計資料や米国国家情報会議の報告なども紹介しながら解説された。①弱肉強食が当たり前の時代、②経済格差を背景に「意欲（やる気）の格差」が広がる時代、③少子化による高校、専門学校、大学への全人時代、④ひきこもり（七〇万人）予備軍（一五五万人）を抱える時代、⑤高等教育からの中途者の増加が雇用問題に直結する時代、⑥発達障害、精神疾患が「無力な弱者」とされる時代、⑦生きづらさ

を充実させることが重要であることを、具体的な事例とご自身の経験を含めて、強調された。

続いて、梁氏は対人援助の専門家の立場から、「ミッシェンとしての和解と共生に向けて」として、以下四点を中心とした。①学生・若者へのエンパワーメント支援へのアクション、②韓国・中国における若者の生きづらさへの理解、③和解と共生への希望―和解のプロセスの可能性、④関西学院やRCCによる若者支援のネットワーク形成の可能性。特に第四点に関連して、問題解決には、領域横断的なネットワーク形成やソーシャルキャピタル（社会関係資本）づくりが必要であり、関西学院としても、若者を支援する組織文化を形成、充実させることが重要であることが指摘された。

研究プロジェクトでは、今年度、秋学期に、国家間の対

動、社会的支援活動

立に翻弄されがちな、中国、アの和解と共生」に関して、韓国の留学生を交え、在日、ワークショップ形式の研究会日本人学生を含め、「東アジアを準備している。

■研究プロジェクト報告

「関西学院におけるキリスト教主義教育の展開」

RCC 副長 山本 俊正

本年度は、プロジェクトの課題の一つとして、『建学の精神考第四集』の編集作業がある。この課題は、ミッシェン展開推進委員会の中にある「自校教育プログラムチーム」より協力要請の依頼があり、RCCとしてこれを受け、本プロジェクトが担当することとなった。『建学の精神考』は、第三集が一九九八年に出版されて以来、発行されておらず、学院創立一二五周年を期して、今年度中に発行することを目標に行っている。現在は、「チャペル週報」をはじめとして、学院を構成する各学校、研究機関によって発行された、「建学の精神」に関連する資料を収集し、時系列に分類する作業を行っている。今後はプロジェクト研究員によって、分類された資料を読み合わせ、編集し、原稿化する作業に移ることとなる。なお、プロジェクト研究員による上記編集作業の打ち合わせ会を二回行った。

編集後記



本号を読んで、関学がインクルーシブな共同体構築をめ

ざしていることに、ふと思ひ至りました。一二五周年を迎えた関学で、RCCはいよいよ精神的に活動を展開してゆきます。